

SUFD Report 2022

令和4(2022)年度 仙台大学FD年次活動報告



報 告 REPORT

本学では、教員を中心にFD活動を実施している。主な活動は、(1) 学内FD研修会の企画運営実施、(2) 授業改善アンケートの実施、(3) シラバス・ルーブリック作成の支援、(4) FD活動の広報・周知である。

(1) 学内FD研修会の企画運営実施

本年度は、次の4つの研修会を実施した。

① 新任教員FDセミナー

4月4日(月)に今年度着任した新任教員を対象としたスタートアップ支援FDセミナーを開催した。本学のカリキュラムをはじめとする教務に関する事項とFD活動等について説明をした。

② 学修状況調査の概要報告研修会

本学では6月8日(水)から6月22日(水)にかけて、学生に対する支援と指導のために日常の学生の学修状況について、基礎的な資料を得ることを目的とした学修状況調査を全学生に

Webアンケートにて実施した。この調査結果については、9月20日(火)に開催した教授会で報告を行った。この調査結果を通して、学年、学科、希望する進路、スポーツ活動の有無等と学修状況との関係が示された。

③ 授業改善FD研修会

9月20日(火)にICT教育推進委員会と共催で研修会を開催した。講義型、実習型に分けて2021年度の授業評価アンケートが高い先生に講師を依頼し、実際のオンライン授業での活用法などの説明を行い、ICT教育推進委員会からは、ICTツールの活用を中心に、説明を行った。

④ 授業づくりのためのFD研修会

本学では、学生と教員が参加する研修会を毎年開催している。今年度は、「体育系大学としてのオンライン授業の可能性とこれから」をテーマに掲げ、12月13日（火）に研修会を開催した。対面で教員と学生が集まり、教員と学生を交えたグループをつくり、ICTツールを活用し、ディスカッションを行った。

(2) 授業改善アンケートの実施

原則としてすべての科目を対象に「FDネットワーク“つばさ”」のフォーマットで「授業改善アンケート」を受講学生全員に実施している。個々の授業の改善を目指し、授業内容・教授方法に対する学生の反応を探ることが、本アンケートの大きな狙いの一つである。本年度は新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン授業が主だったことから、Webアンケートにより実施した。この結果は、本学独自の「授業改善アンケート活用フォーム」を用いて、集計結果を基に各教員が担当科目と全体平均などとの比較が出来るようになっている。

(3) シラバス・ルーブリック作成の支援

教育改善企画運営委員会では毎年次年度の様式や記載内容の項目について検討し、統一様式により原則すべての開講科目について作成を依頼している。学生にとってよりわかりやすいシラバス・ルーブリックとするために、本年度も教員に配布しているシラバス・ルーブリック作成要領（「シラバス・ルーブリック作成の手引き」）を加筆修正し、シラバス・ルーブリック入力の大変な変更点については、別途、資料を作成し共有を行った。なお、シラバス・ルーブリックは本学ホームページにも掲載し、保護者等も閲覧できるようにしている。

(4) FD活動の広報・周知

① FD広報冊子の作成

本学では、FD広報冊子（SUFD Report）を年に1度発行している。本年度発行するもので第9号となる。この冊子の発行の目的は、本学の教育改善企画運営委員会が実施しているFD活動の内容を、学内外に周知することである。

②学外のFD研修会情報の提供

学外において開催されているFD研修会についての情報提供を行っている。メールやポスター等で届いた開催案内を教員向けに整理し、全教員を対象にメールで周知をしている。今年度については、1名の委員が「第24回基盤教育ワークショップ」および、「山形大学データサイエンス教育研究推進センター主催のFD研修会」にそれぞれオンラインにて参加した。



報 告 REPORT

2022 年度 新任教員のための FD セミナー



開催プログラム

日 時：令和 4 年 4 月 4 日（月） 11：00 ～ 12：30
 会 場：A 棟 2 階 大会議室

時刻	内容		
11:00	開会挨拶		
11:05	教務について		
	① 履修登録と成績評価 ② 教室での機材の利用 ③ 学生の出欠管理 ④ 学生への連絡・告知 ⑤ 休講 ⑥ オフィスアワー ⑦ その他		
11:20	カリキュラムについて		
	① カリキュラムポリシー ② カリキュラム全体の編成 ③ 担任制		
11:35	教養教育について		
	① 体育系大学の基礎教養 ② 仙台大学の専門教養演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ③ 学習基礎教養演習		
11:50	FD 活動について		
	① FD 活動とは ② シラバス等について ③ 授業改善アンケート ④ FD 研修会		
12:00	フリートーク（質問・疑問など）		
	グループ	新任教員	FD 委員
	①	山内明樹・朴澤憲治	金一坤*・平良拓也
	②	南條正人・伊藤愛莉	佐藤周平*・加畑碧
	③	橋本智明・安藤歩美	林直樹*
	* コーディネーター役		
12:25	閉会挨拶		

報告 REPORT

令和4年度 授業改善FD研修会について

目的：授業評価の高い教員の授業の実践例を聞くこと、ICTスキルの向上及びオンライン授業の高度化に向けた取組み事例を聞くこと等によって、今後の授業の参考とする。

主催：教育改善企画運営委員会

共催：ICT教育推進委員会

日時：令和4年9月20日（火）教授会終了後

対象者：仙台大学教員

開催方法：オンライン（Meet）による開催

内容：

第一部：高評価授業担当者による教育事例紹介（30分：各15分×2名）

<講師>

講義型 氏家教授

実習型 馬教授

第二部：ICTを活用した教育事例紹介（15分）

<講師>

川戸講師（ICT教育推進委員）

・授業改善のFD研修会

FD委員会の年度目標にある「ICTスキルの向上及びオンライン授業の高度化」をテーマとした研修会を開催した。2021年度の授業評価アンケートの高評価授業担当者に講師を依頼し、講義と実技のそれぞれの形態についての教育事例紹介を実施した。また、ICT教育推進委員会よりICTを活用した教育事例紹介として、ICTの活用の意義や方法、今後の課題についての研修を行った。



「人の心と行動」氏家靖浩

令和4(2022)年度

授業改善FD研修会 版

人の心と行動

仙台大学 健康福祉学科
氏家靖浩 うじえ・やすひろ



「人の心を『こうだ!』と勝手に決めつけるのは、やめよう」
「思い込みを捨てよう」


「人の心と行動」→科学として考えます

↓

観察、測定←推測ではない

↓

このヒントを学ぶのがこの授業の目的
学生時代はもちろん生きていくうえで大切




お品書き(その1)

- ・聴講されている皆さんを学生と考えます
- ・こういう時代の「教養展開科目」の意義
→それとなく意見を表明します

「自分で学ぶスタイルを身に付けよう」

- ・まず自学自習を気づかせます
- ・またコミュニケーションを促します
- ・気楽に勉強していきましょう



「人の心を『こうだ!』と勝手に決めつけるのは、やめよう」
「思い込みを捨てよう」


恋をしたら顔が赤くなった

↓

昨日までの思考回路(推測、一般論)
恋をするとワクワクするからな


↓

今日からの発想法(行動科学的思考)
皮膚外面近くの血流の増加?
流れの加速?体温が高くなった?




お品書き(その2)

- ・リラックスして適度に気楽に聞いて下さい
「こんな考え方もあったのか!」という
ヒラメキが共有できることを願います
- ・そんなヒラメキがあると
少し気楽になります
- ・そうしたヒラメキと一緒に
見つけ出す時間にしたいと
思います



今日のキーワード

「自分で学ぶスタイルを身に付けよう」
「人の心を『こうだ!』と勝手に決めつけるのは、やめよう」
「思い込みを捨てよう」




お品書き(その3)

- ・授業はポイントを絞ります
- ・毎回1、2個のキーワードを紹介します
→それを覚えて下さい

「人の心を『こうだ!』と勝手に決めつけるのは、やめよう」
「思い込みを捨てよう」

- ・気楽に勉強していきましょう



「実習型」馬佳濤



工夫したこと

- 初心者⇒基礎、ラリーを続ける楽しさを味わえさせる
- 経験者⇒中・上級レベルの技術を教える
- 教職希望⇒指導方法も教える
- 進捗についていけない/消極的⇒直接練習相手にする、何が問題かを対話して解決する



それぞれの特徴や要望に応じて指導することによって学習成果アップ

対象科目

- 科目名: 卓球
- 対象者: 全学科 1年生40名程度
- 履修: 専門基礎科目/教職科目
実技ネット型選択必修 1単位
- 授業形態: ハイブリッド型

オンライン

形態: リアルタイム or オンデマンド(隔週)

内容: 理論編、実践編、観戦編

対面

授業の展開

- 準備&集合 10分
卓球台の準備、卓球関連のウォーミングアップ
- 授業開始 20分
自由練習 主に前回習得技術の復習
その間に出欠確認(タイムロスの減少、コロナ感染予防のため)
- 技術講習 30分
模範演技&説明→練習 相手ローテーション
- ゲーム 20分
その日習得した技術を活かしたゲーム
- 片付け、まとめ 10分

理論編

- 目標: 卓球基礎知識、理論の習得
- テーマ: 「卓球の歴史を知る」、「卓球ルール」、「卓球の魅力」、「中国の卓球事情」など
- 工夫
 - ①リアルタイムでアクティブラーニング(欠席者や繰り返し視聴できるため録画と配信)
 - ②オンデマンドで音声だけではなく顔出し(学生に孤独感を感じさせない)
 - ③学科の専門領域と卓球競技を結びつけて、興味関心を引かせる

工夫したこと

事前アンケートによる情報把握

理論編

- 卓球戦術分析、体力要素分析⇒情報戦略、スポーツトレーナー

例: 関連人物の紹介

日本を代表するトレーナー

仙台大学体育学部体育
H18卒 田中 私人
<日本卓球協会男子ナショナルチーム フォイナルコーチ>

理論編

- 生涯スポーツとしての卓球⇒スポーツマネジメント
- 子どもの卓球⇒子ども運動教育、コーチング

生涯スポーツ

- 卓球は他のスポーツに比べて運動量や激しい動きが少なく、安全性も高いため、子どもからお年寄りまで幅広い年代が生涯楽しむスポーツ
- 長期的に継続して楽しむための健康増進の効果があり、手裏しほりなどのように打ち返すかを判断したりするための技である

子どもの卓球競技開始年齢と練習量

Sports For All

観戦編

オンデマンドで動画配信

- 目標: 世界一流選手の試合を観戦し、卓球に関心興味を持つ
- 内容: 世界トップ選手のプレー、台とラケット無しでもできる動画紹介

張本智和 vs 馬龍 | 男子ワールドカップ2020 準決勝

自宅で卓球

Sports For All

理論編

- 卓球選手の食事⇒スポーツ栄養
- 卓球の健康効果⇒健康福祉

食事

卓球競技中に消耗する測定エネルギー量
 小体質が60kgの人の全身に燃えられているグリコーゲン量=約1000kcal

摂取 (kg) × 時間 → kcal
 65 (kg) × 3時間 → 630kcal
 ⇒ 300kcal

美しくなるほどグリコーゲンが使われる

健康効果

- 卓球を行って脳の発症リスクが20%、心臓病の発症リスクが30%、糖尿病の発症リスクが50%が減少される
- 1週間3時間以上行う人がしない人に比べて、30~40%心臓病リスクが減少、毎日30分以上行う人が、心臓機能の健康を維持できる

Sports For All

ご清聴ありがとうございました

Sports For All

実践編

ICTを活用した動画や写真添削

- 目標: 基本技術のフォーム・動きの習得
- 内容: 基本技術の模範、注意点をコメントで吹き出しなど

Sports For All

実践編

課題として学生から送られてきた実践(素振り)動画をコメント入りでフィードバック

Sports For All

「ICT を活用した教育事例の紹介」川戸湧也

令和4年度 授業改善FD研修会
ICTを活用した教育事例の紹介
現代武道学科 川戸湧也

2020年度からのコロナ禍・・・
時代の潮流は“アナログ”から“デジタル”へ
私たちの仕事はどう変わったか？

【アンケート】
あなたの仕事は・・・
『増えた？』『変わらない？』『減った？』

→Meetの「アンケート」機能から回答してみてください
Meet右下の「[O]△×(アクション)」ボタンから「アンケート」を開く

なぜICTを活用しなければならないのか？

大前提 | **仕事を楽** (効率的・合理的) にするため

- ▶ 使わなければならないもの
- ▶ なんとしてもオンライン会議
- ▶ 紙よりも絶対タブレット

これらは**ナンセンス**な考え方である = 目的を見失っている

一方でICTの活用はできた方が**絶対**いい
選択肢を増やす・・・この仕事はどう進めるべきか？
→仕事に多様性と合理性を与えるためにICTは必須

ICTの活用
学びの効果・効率・魅力を高めることができ、授業外学習についても促進することができる

なぜICTを活用しなければならないのか？

授業におけるICTの活用事例

- ▶ 授業 (含 遠隔) における双方向性の保証
 - ▶ 事前知識・前提条件の確認
 - ▶ 意見の発表・集約
- ▶ 課題の提示・管理
 - ▶ 多様な評価の実現
 - ▶ 研究時間の創出
- ▶ グループでの活用 (※要注意)
 - ▶ 協働的な学習の促進
 - ▶ 学生相互の教え合い・関わり合い促進

それぞれ教員視点・学生視点で整理していく

授業におけるICTの活用事例

授業 (含 遠隔) における双方向性の保証

- ▶ 事前知識・前提条件の確認
授業の冒頭でFormなどを用いて小テストを実施する

活用例) 以下は「大麻」に関する○×クイズです。回答しなさい。
問① 日本で販売されている大麻は検査を受けた「合法」のものであり、購入しても罪に問われることはない
問② 大麻は吸引するだけでなく、所持していても違法になる
問③ 日本は自生している大麻は無い
問④ 大麻は覚醒剤と同じ法律によって規制されている
答① × | 違法です。絶対に購入してはいけません
答② × | 輸入することは違法ではありません (本白現在 | 新法を輸入する可能性があるため)
答③ × | 北海道の一部地域に自生しています (採取すれば罰金無用で逮捕です)
答④ × | 覚醒剤は「覚せい剤取締法」で規制されていますが、大麻は「大麻取締法」で規制されています

教員目標
前回の振り返りや本時の内容の導入になり、焦点化もできる = 効率UP!

学生目標
自分の持っている知識の正誤の確認と、学びの必要性を認識 = 動機付けにつながる

授業におけるICTの活用事例

授業 (含 遠隔) における双方向性の保証

- ▶ 意見の集約・発表
実名で回答しにくいのが、授業として扱う必要がある内容

活用例) 性自認と恋愛対象
精通あるいは初潮の時期
体罰・ハラスメントの経験

Google Formを無記名かつアドレスの回収なしに設定
→周りの視線を付けない環境での授業展開が可能になる
ただし活用には細心の注意を払う必要あり (教員の倫理観が重要) x

教員目標
社会問題に即した授業の展開に貢献 = 学びの効果高められる

学生目標
自分の持っている知識の正誤の確認と、学びの必要性を認識 = 動機付けにつながる

授業におけるICTの活用事例

課題の提示・管理

- ▶ 多様な評価の実現

ICT活用の背景のひとつ・・・コロナ禍
感染症拡大防止は現在まで続く課題『**テストをどうするか問題**』
テスト・・・シラバスで提示した目標 (認知目標) を達成できたか点検する行為
→「テストで得点する」ためには「テストに参加する」テストの前段が怪しくなっている
そもそもテストでは認知的な目標の確認しかできない (※ 実技テストでは技能)
認知領域だけでなく、技能、情意、社会行動といった他ドメインの評価も重要

例) クラスルームに日々の課題 (ラーニングポートフォリオ) を提示
「今日の授業のテーマはなんでしたか？」
「あなたにとって特に意味のあった学びはなんでしたか？」

授業におけるICTの活用事例

課題の提示・管理

- ▶ 研究時間の創出
評価方法を多様にする + オンラインで課す
→**集計**を容易にすることができる
評価をする上で大変なこと・・・『**採点**』
→あらかじめ**ルーブリック**を作成・・・採点基準の可視化・共有 = 客観性

いずれもGoogle Classroomの標準機能

教員目標
大量の回答用紙は不要になり、得点の集計もPC上で完結する
採点にも一応の客観性を保証できる (ルーブリックが軸を定めているような設計の設計が必要)
研究時間の創出に貢献する

学生目標
権威による不利益の解消につながる
経済的事情によってはアルバイトの従事時間を増大させる等につながる

授業におけるICTの活用事例

グループでの活用

- ▶ 協働的な学習の促進
- ▶ 学生相互の教え合い・関わり合いの促進

学生たち各自でMeetを使う + Jamboard (ホワイトボード機能) も使える
GoogleスライドやGoogleドキュメントの共有もできる
→授業内で課題を課し、それを自宅等にしながら**共同で取り組ませる**

実技授業においては観察のためにタブレットでの撮影・確認ができる
運動やゲームの出来栄を確認し、課題の解決に取り組める
→**相互監視 (リフレクション)** 的な状況に陥ることが懸念される (ほとんど議論されていない)
「見てくれるからやる」| 「見られないならやらない」 そんな人間ていい?

授業におけるICTの活用事例

課題の提示・管理

- ▶ 協働的な学習の促進
- ▶ 学生相互の教え合い・関わり合いの促進

学生たちが適切に使えばこれらのメリットは発揮される
→学習意欲が低い学生に行うことは避けたい (おそらく失敗する)

→「**運動・ゲームの見せ合い**」はそもそも体育授業にフィットするのかわ
ICTが (目の前の) 体育授業にフィットするかわ検討が必要
人が見てくれないと何もしない社会人 = 我々が目指す姿ではない

教員目標
授業の効果・効率・魅力を高める“魔法”になりうる (魔法が授業内容に適用可能あり)

学生目標
学習意欲が高い集団ほどよく学べる (魔法はあくまで補助的な手段)

まとめ

ICTは我々の仕事を楽にするために存在する道具である

- ▶ 振り回されない
- ▶ 目的・課題 (Issue) ベースで利用を検討

活用にはさまざまな方法があるので目的・課題に応じて利用

- ▶ 授業 (含 遠隔) における双方向性の保証
- ▶ 課題の提示・管理
- ▶ グループでの活用

空いた時間を研究や自己研鑽に充てる → 教育研究の好循環

報告 REPORT

令和4年度 学修調査の概要報告

【目的】

・本調査の目的は、学生に対する支援と指導のため、日常の学生の学修状況についての基礎的な資料を得ることである。

【方法】

1. 調査対象

・体育学部に所属する全学生を対象として調査を実施した。

2. 調査内容

・「学生の学修状況に関する調査」というアンケートを Google フォームにて作成し、調査に使用した。

・質問内容は以下の通りである。:

- ①基礎的情報：性別、学年、学科
- ②授業時間以外での自主的な学習時間（1日あたりの平均）
- ③授業時間以外での運動やスポーツ活動の時間（1日あたりの平均）
- ④大学での学習で最も力を入れていること
- ⑤高校3年時での授業時間以外での自主的な学習時間（1日あたりの平均）
- ⑥高校3年時での授業時間以外での運動やスポーツ活動の時間（1日あたりの平均）
- ⑦卒業後の進路として最も希望していること

3. 調査の手続き

・調査期間は令和4年6月8日（水）～6月22日（水）である。

・1年生は各クラスの、2年生以上は学科又はコースのオリエンテーションで使用した Google クラスルーム内で、「課題」として Google フォームの URL を配布、期日までの回答を依頼した。

4. 統計解析

・得られた結果は各学年に占める割合（%）で示した。

・各学年、学科および性別と質問項目をクロス集計し、 χ^2 検定を行った。統計的有意確率は5%未満とした。

【結果】

1. 回答率について

・学科学年別の回答者数と回答率を表1と表2に示した。全体での回答率は91.6%となった。

・なお、4年生には休学・留年者を含んでいる。

学科	1年	2年	3年	4年	全体
体育	345人	355人	288人	306人	1294人
健福	100人	63人	102人	94人	359人
運栄	65人	73人	68人	72人	278人
ス情	56人	31人	37人	40人	164人
現武	48人	37人	43人	43人	171人
子教	28人	27人	24人	34人	113人
全体	642人	586人	562人	589人	2379人

表1 学科学年別回答者数（人）

学科	1年	2年	3年	4年	全体
体育	99.1%	94.7%	85.7%	86.9%	91.7%
健福	98.0%	87.5%	94.4%	91.3%	93.2%
運栄	100.0%	97.3%	89.5%	84.7%	92.4%
ス情	100.0%	91.2%	80.4%	97.6%	92.7%
現武	100.0%	90.2%	84.3%	84.3%	89.5%
子教	100.0%	93.1%	66.7%	85.0%	85.0%
全体	99.2%	93.6%	86.1%	87.6%	91.6%

表2 学科学年別回答率（休学者を含む）

2. 概要まとめ

- ・ 回答率が約 90% 以上であり、本学学生の状況を反映しているものと考えられる。本調査は、横断的な調査であることから、学年別の比較は学年ごとの特性がある可能性を踏まえた上でデータを解釈する必要がある。
- ・ 全体として学年進行に伴い、学習時間の増加および運動時間の減少がみられた。四年生で学習時間が相対的に長くなっているのは、教員採用試験など就職対策のための学習の必要性と関連があると考えられる。
- ・ 1～3年生において、1時間未満の運動時間である学生の割合が昨年度に比べ増加した。その一方で、学習時間は昨年度に比べて増加傾向であった。
- ・ 高校3年時の学習時間については学年および学科間で関連はみられなかった。本学に入学してくる学生の特徴として捉えられると思われる。一方で、高校3年時の運動時間については2年生の「2-3時間」と回答した者の割合が少なく、コロナ初年度（2020年度）による影響である可能性が考えられた。また、学科間でも1時間未満の運動時間を回答する者の割合で差がみられた。これは、学科学生の基本特性を反映していると考えられる。
- ・ 1年次には資格や免許の取得を目標とする学生が60%弱と最も多いが、この割合は学年の進行とともに低くなる。それに対して「教養を身につける」ことを重視する学生が増加している。これは昨年度および一昨年度と変わらず、本学学生の特徴としてとらえても良いと思われる。
- ・ 進路の希望として1年次では教員希望が最も多いが、学年が進むにつれてその割合は減少する。それに対して一般企業を目指す学生が増加している。一方、「公務員」や「大学院進学」「学科特有の進路」を目指す学生はいずれの学年においてもある程度の割合が見られた。これも昨年度と変わらず、本学学生の特徴としてとらえても良いと思われる。

以上



報 告 REPORT

令和4年度 FD研修会

「体育系大学としてのオンライン授業の可能性とこれから」

日 時：令和4年12月13日（金）14：30～15：50

会 場：LC棟1階

テ ー マ：「体育系大学としてのオンライン授業の可能性とこれから」

出 席 者：＜FD委員＞平良委員長、白幡委員、林委員、佐藤周委員、金委員、加畑委員、
田口委員、後藤委員、賞雅委員、久能教育企画部長、渡邊教育企画部長、玉置委員、
伊勢委員

＜新任教員＞安藤先生、朴澤先生、伊藤先生、橋本先生、山内先生、南條先生

＜協力学生＞赤坂翔汰さん（体育2年）、小倉大和さん（同1年）、

佐藤越斗さん（福祉3年）、水戸更さん（同2年）、

田近嵯季さん（栄養2年）、平野慎吾さん（同2年）、

齊藤駿太さん（情報2年）、平澤夢子さん（同2年）、

菊池太陽さん（武道3年）

菅野ひかるさん（子ども4年）、蜂谷陽美さん（同4年）

内 容：

- (1) GCR（反転学習）
- (2) 開会式・挨拶・研修会の進め方についての説明
- (3) グループ討議
 - ＜討議の観点＞
 - ①オンライン授業のメリット・デメリット
 - ②オンライン授業での工夫
 - ③オンライン授業の課題とこれから
- (4) 全体会・各グループの報告
- (5) まとめ・閉会



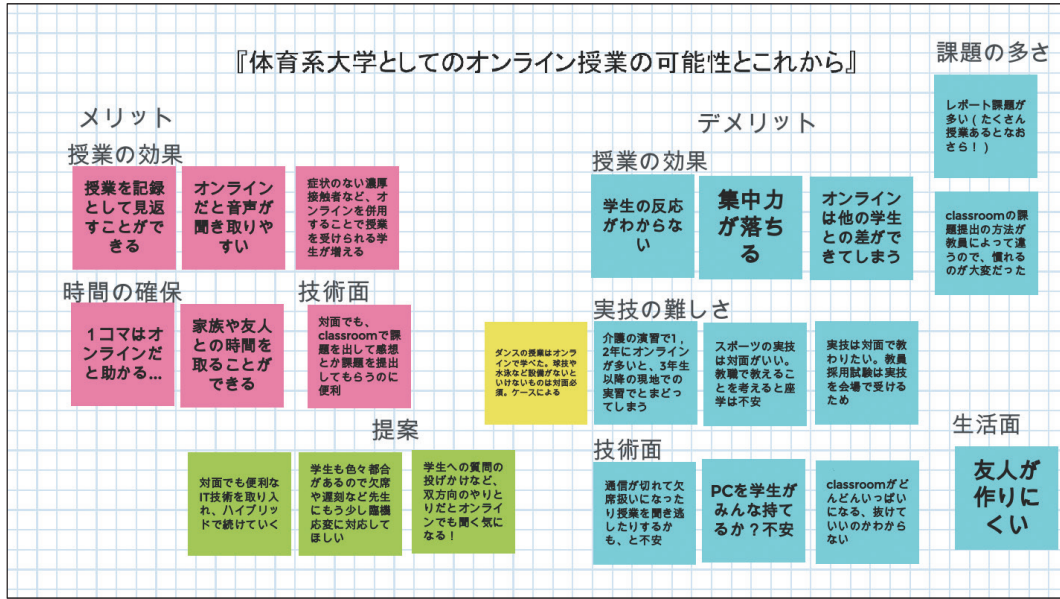
参加者、およびディスカッションのグループ

〈討議〉

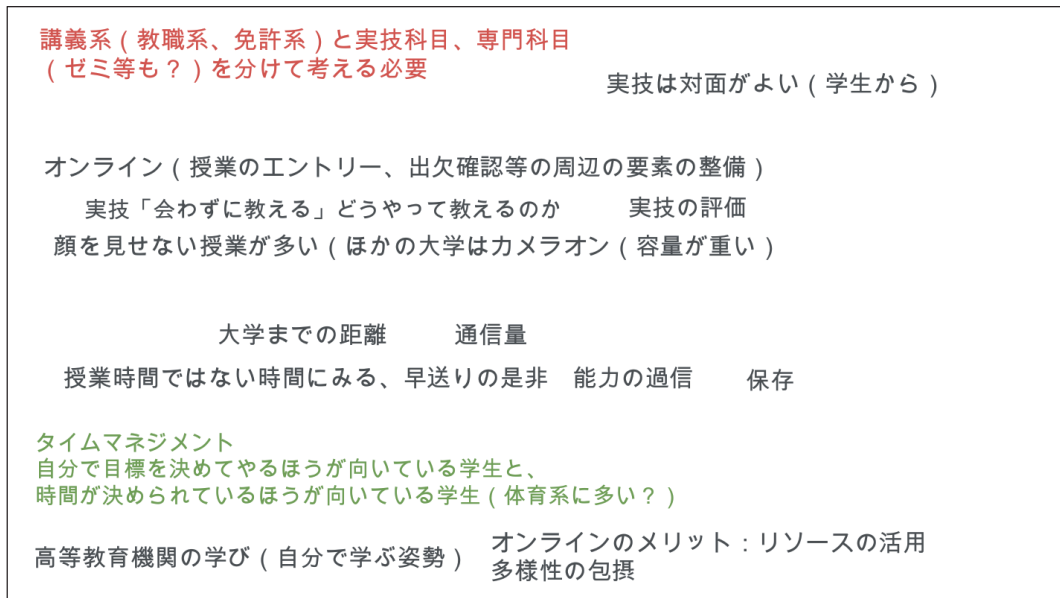
グループ	教 員	体 育	健康福祉	運動栄養	スポ情	現代武道	子ども
A	安藤歩美 朴澤憲治 後藤満枝	小倉大和	佐藤越斗		平澤夢子		
B	伊藤愛莉 佐藤周平 白幡真紀	赤坂翔汰		平野慎吾		菊池太陽	
C	橋本智明 山内明樹 金 一坤		水戸 更		齊藤駿太		蜂谷陽美
D	南條正人 田口直樹 林 直樹			田近嵯季			菅野ひかる

グループ討議のまとめ（学生・教員の意見）

< Aグループ >



< Bグループ >



<C グループ>

『体育系大学としてのオンライン授業の可能性とこれから』

【オンライン授業を受けての意見】

齊藤
(良) 家が遠く、オンラインだと家で受講できるから良い
(悪) 質問など対面のような意思疎通がとりにくい

水戸
(良) 資料がすぐ見れるので復習が自分のペースでできる
(悪) リアルタイムで解決したい問題が解決できない

山内
※実習、実技は対面でないと感じ、体験などがわかりにくい
※実技試験をレポートにするのはどうなのか、技術を身につけているかわからないのではないかと

山内
全部対面、オンラインにするのではなく、上手く使い分ける

水戸
MEETでのグループワークや学生へのリアクションを求められると授業を受けている感覚になる

蜂谷
授業のやり方によって、同じオンライン授業でも意欲がわくわくがないがある

金
オンライン授業用の動画制作に苦労した
オンラインでの実時間授業するのはする方も受ける方も大変
使いまわせる反面、更新作業も必要

蜂谷
(良) 資料の見返しがしやすい
(悪) 対面コミュニケーションが少ない、緊張感がなくなりやすい。実習が対面の方が体験できてわかりやすい

橋本
ICTの活用は効率を良くするため、それを踏まえて今後どうするべきか。文部科学省からオンライン授業に関してルールが定められていることも考慮する必要がある

【総括：オンライン授業の今後】

- ・ 実習は対面が原則
- ・ 主は対面、復習など補助的にオンライン
→ 主体的な学習環境として良い
- ・ 気象、コロナの状況で急遽オンラインにするのはあり

記録：橋本

<D グループ>

『体育系大学としてのオンライン授業の可能性とこれから』

【オンライン授業の工夫】

- ・ カメラオンにして手遊びをするなど、オンラインでも実技に対応できるように工夫した。

【学生目線の良いオンライン授業】

- ・ 資料の進行が早く、ノートテイクがしにくい。スクショをしても授業後にノートテイクをする時間がない。
→ 先生がオンデマンドで黒板に板書をしている動画を配信していて、先生と一緒に板書をしなが授業ができてよかった。
- ・ 動画から考察したことを課題で行い、次回の授業で先生が復習をしてくれることで学びになった。

- ・ 課題が多すぎて私生活に支障をきたす。←先生からは、課題でしか授業を理解しているか確認できない。

【改善】

- ・ 対面とオンラインが両立した授業をしてほしい。対面で実技をすると失敗も含めて学びになる。
- ・ 授業内で終わる課題内容。もしくは、期限が1週間など課題に余裕をもって取り組む時間がほしい。

南條 (メリット) コロナ等の緊急時も受講できる

南條 (メリット) 何かしらの理由で学校に行けない学生も受講することができ

南條 (メリット) 復習も確認することが可能

菅野【メリット】 パソコンの技術が向上した。

林 (メリット) 作業を出す心配がない(オンデマンドなどで対応できるので、試合や出張に集中できる)。

田近【メリット】 他大学などの授業を現地に行かなくても受けられる

林 (メリット) 手持ちの通信量の差が生じる

林 (メリット) スルをする学生が増えた。

菅野【メリット】 授業内の質問をしにくい。

菅野【メリット】 講義終了後、身についた知識が対面に比べて圧倒的に少ない。

菅野【メリット】 復習しないといけない課題がオンラインだったため、実習が困難だった。

田近【メリット】 学校に通っていない感覚がない

南條 (メリット) 聴覚障がいのある方などには、不便な場合もある。例えば、手話通訳の映像が入っていない場合など。

田口 デメリット 健康に問題

菅野【メリット】 講義終了後、身についた知識が対面に比べて圧倒的に少ない。

田口 デメリット 万人に対応できない

南條 (メリット) 学生と教員による対面コミュニケーションが減少

南條 (メリット) 選修環境によって受講が難しい場合もある

SUFD Report2022 令和4年度仙台大学FD年次活動報告

編集：仙台大学 教育企画部 教育改善企画運営委員会

委員長：平良拓也

委員：白幡真紀 後藤満枝 林 直樹 田口直樹 佐藤周平 金 一坤 加畑 碧 賞雅さや子

発行：仙台大学

〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南2丁目2番18号 電話：0224-55-1121 (代表)

制作・DTP：株式会社仙台紙工印刷

発行年月日：2023年3月31日